

## 高津区おはなしアーカイブ

●英 径夫（はなぶさ みちお）さん

昭和10年生まれ 78歳

川崎市高津区二子在住



### ◆ご自身について教えてください

生まれたのは、東京の神楽坂。

空襲で家が焼け、あちこち転々として、最後にたどり着いたのがここ。昭和20年の10月からこちらに来了。住んでいたのは二子の大貫病院の裏で、253番地っていつても今の人にはわからないかな。逆に今の番地は知らない（笑）。子どもだったから細かいことは解らないけど、父親が戦時中、今の消防署の

前のあたりの工場に徴用されていた関係で、この辺に来たんだと思う。

昭和20年だから小学校4年生のときだね。

俺らの頃は小学校じゃなくて「国民学校」

っていつていた。高津国民学校。その頃は1学年7〜8クラスくらいあったかな。俺らの年代はなんでか知らないけど、人数が多いんだよね。一級上もちよつと少ないし、一級下も少ない。クラスにして二クラスくらい少ない。昭和10年生まれが多かったのかな。

転校してすぐは二部授業だったけど、5〜6年生のときはもう二部授業はなくなった。どうして二部授業をしていたかっていうと、机・椅子と教員が足りなかったんだ、今から思うとね。だから教員資格がない人も代用教員になっていた。教師の半分は代用教員で、教えながら教員資格を取っていた。教員も全部兵隊に持っていかれちゃったんだよね。

高津小学校には教室はあったんだけど、机なんかはオンボロになっちゃって、椅子もないんで、椅子と椅子の間に板を渡して、何人か座っていた。机の上も板を渡していたのがあったのかな、ひとりひとりの机じゃなかったね。中学を卒業する頃になってやつと一人用の机になったけど、それまでは皆2人掛け、

3人掛けが当たり前だった。そうしないと60人一クラスに入らなかつただろうしね。

### ◆こちらに越してこられた頃の印象は？

東京からこちらに来る前に、2〜3カ月茨城にいたから、ここへ来たときも田舎とは感じなかつたけどね。ただ、荒れているなあ〜と思ったね。というのも、あちらこちらに焼夷弾のかけらが落つこちているし、壊れた家もずいぶんあるし。その前にいた茨城は、空襲にあつていないから、昔ながらの農家、田園風景だった。

いっぱい落ちている焼夷弾を拾ってきてドブ板の代わりに使つたりしてね。再利用していた。六角形の筒だったから、縦に渡して並べるとどぶ板にちようど良いんだよね。

あの頃のバラックっていうのは本当にバラックだね。廃材持つてきちゃくつつけて使つていたね。今のホームレスの人が自分のうちを作つているのとおんなじだよ。金のない者が結構住み着いていたからね。朝鮮や中国から徴用された人やその家族も結構住んでいたからね。

町も表通りだけが道として機能していたけ

ど、横に入っちゃえば本当に畑だのオンボロ小屋だのあって。大貫病院の裏も梨畑があって。その間にちよこちよこと似たような家が何軒か建っていたけど、なかにはバラックみたいな家もあったよね。

### ◆子どもの頃の遊びは？

多摩川で泳いだよ。で帰りには他の地区の子にいじめられたんだよ(笑)縄張りがあるんだ子どもなのに。二子の子はだいたいこの辺とか、ってね。そこから下流になると瀬田や諏訪の縄張りだから、出て行けよって威嚇されてね。瀬田や諏訪を仕切っていたガキ大将がいた。二子を仕切っていたのはいなかったなあ。小粒なのばかりだったから(笑)ボスがいないかったんだよ、腕白坊主が。その土地で代々生まれ育ってきたヤツがボスにならないと、絶対駄目だからね。

中学校くらいになって、泳ぎながら釣りましたよ「あんま釣り」っていうの。ただこう流して、あんま釣ってるのはハヤ。針に川虫の餌付けて、こんな竹の棒で流すの。

料亭では屋形船を持っていて、網を打っているんだよね、そしたら鮎だけを捕ってあとは捨てちゃうから、それを拾ってくるんだ。

二子新地のほうも、中学時代は遊び場所だったね。かくれんぼしたり鬼ごっこしたり、料亭街は入り組んでいて、車が通れないところがあつたから、便利なんだよ。ちよつと広いところでも人力車がやつとつとところだから。

今は蓋をしちゃつて暗渠になっているけど、川が流れていてね。ここにね、料亭が竹で編んだ籠にウナギだのそれこそ鮎だの魚をいれていたんだ。でつかい籠。それを盗りに子どもが行くんだ。いたずらでね、籠のなかに入っているウナギだとかを黙って盗つてきちゃう。

### ◆写真を多く撮られています、写真館をされていたんですか？

写真館じゃないけど、その日暮らしの生活を資金を稼ぐために頼まれたら出かけていって写真を撮っていたよ。うちは写真機を持っていったから重宝がられて、現像したり、引き延ばしたり。あの頃二子の花街は結構商売になったんだよ。且那連中が来て、記念撮影するから写真屋すぐ来いって呼ばれてね。高津に公民館ができたばっかりのときは、芸者さんの発表会を撮影しに何年か行ったもんね。

溝口こども文化センターのあそこ。あそこにかまぼこ形の。お客さん400何人くらいで満タンになる公民館。あそこで芸者衆の発表会もやっていた。

### ◆どんなお仕事をされていたんですか？

俺はもともと電気工、電気屋で、当時「二子青年会」の役員で、青年会をまとめているいろんなことをしていたから、あいつは使えろってんで役所へ入られて誘われて入っちゃつた(笑)。あの頃は役所もどんどん大きくなっていくから、職員も足りなくて、現地採用でこれはって思ったヤツを引き抜いていったんじゃないかな。

「二子青年会」は昭和29年、田中屋の鈴木さんが音頭を取って作ったんだ。戦後はろくな娯楽もなかったから、みんなが集まれる場所や、芝居や出し物をする場が欲しいってことで。お寺借りたり、お宮の本堂を借りたりしてね。お祭りにも参加したよ。お宮の本殿もね、たまに掃除するから貸しといてくれて、鍵を預かっていた。先輩達も掃除を交代でやっていた。

二子青年会は多いときは50人くらいいたなあ。できたのは溝の口と久地、下野毛、橘

村と宮前村と向ヶ丘にもそれぞれあった。俺が高津地区のまとめ役をやっていたのは昭和35年。公民館に入ったのは昭和38年。

公民館では電気主任と社会教育主任のふたつ掛け持ちしていたんだ。社会教育っていうのはいわゆる、成人学校ってやつ。講座をいっぱいやってた。俺が公民館に入った翌年はね東京オリンピックの年だから。「生活改善」「街の美化」に関する事業をやれて、文部省と厚生省から助成金も入っていました。

今は趣味的な科目が多いけど、あの頃は職業に関する、生活に関する、それから文化的なことと、いくつかに分かれてやっていた。何故かっていうと集団就職で、若者がいっぱい入ってきた。あの頃でいう金の卵がいっぱい。若い人が多かったので、仕事しないときどうするか、っていうんで、町でそういう文化的な講座をやって欲しいと、今みたいに塾みたいなものはないし、習い事に行くっていつでもお金もそうそうない。それに勉強して上に行かないと、収入も増えない。必要に迫られてやっている人も多かった。その後は外国人もいっぱい来たから日本語教室もやっていたね。

#### ◆戦争後、街の様子はどうでしたか？

高津公民館が大山街道沿いにできるのが昭和28年だから、その頃だね。公民館のそばの、屋外で闘犬をやっていた時期がある。大山小径の碑のところ。年に何回か。胴元みたいな人がいてさ。周りには土佐犬を飼っている人も結構いたよ。あと軍鶏ね。土佐犬や軍鶏を戦わせて、どっちが勝つかって言って、賭けをして。溝の口界限だけじゃなくてあちらこちらにあったと思うよ。特別な人じゃなくて、普通の人も見に行っていたし。よくわからないうけど、どっかに胴元がいて賭けさせていたんだと思う。闘犬はそのあとすぐ寂れちゃった。

戦後、昔の二子の亀屋っていう料亭の跡地が「リバーサイド」っていうダンスホールになってた。「リバーサイド」が営業していたのはほんの数年だけ。あとは諏訪屋農機具店が倉庫代わりに使っていたね。

このあたりには建築関係の職人が結構いたね。大工がいて、鳶職がいて、左官屋がいてペンキ屋がいて。そして畳屋でしょ、襖でしょ。今は畳屋と襖屋が残っているけど、大工もいるかな。昭和30年代は、まだ街道沿いも昔の街並みが残っていた。店じまいはしち

やったけど、建物は残っていたよ。今でも金物屋はあるけど。建て増しをしたんだろうなあ、この次男坊が同級生だった。

地図には載っていないけど、街道沿いには鍛冶屋も何軒かあったんだよ。街道は馬が通るから、馬のひずめに蹄鉄を打つ鍛冶屋。片町の踏切のそばの入口のところにも岡村って鍛冶屋があつて馬蹄専門だったんだ。

あの頃は、このあたりは双子が多かったなあ。

花街で遊ぶ人はだいたい東京から来ていたんだよね。地元の間は顔が割れてばれちゃうから「おまえあそこで遊んでいたらどう」って。俺らの前、青年団の時代はお祭りのあと、神輿担ぎ終わったあとに「鉢洗い」って言って料亭にあがってどんちゃん騒ぎをするのが恒例だったんだ。そういうときじゃなきゃ、職人なんか行かれなかったところだから料亭なんて。年に一回、二子神社の祭事のと、打ち上げだつてんで料亭に繰り出す。

我々の代、青年会はそれを辞めちゃったんだ。せつかくご祝儀で集めた金を、一晩で使っちゃしようがないってんでね。神輿を修理する金もなくなるってことにならないように。あの頃でね、昭和30年代はじめてでいたい

年間修繕料金20万くらいかかっていたんだ。担ぎ回って結構壊れるし、痛むし、雨降って濡れちゃったら腐ってきちゃうからね。当時は月給が1万円だったから、20万っていうと一年分の給料より高い。細かい細工は、東京のかっぱ橋に指物師がいたからそこに頼んで、修理は行徳まで行くんだよ。だから何年か一回、行徳まで持っていくって、直してもらって、二子橋のところにおろして、そこからお宮まで担ぎ込んでしまう。その御神輿はまだ二子神社で使っているよ。ただ今は町会で管理しているよ。昔はそれを青年会で管理していたけどね。

神輿が町を一回りしてくると、2000くらいのご祝儀がもらえたんだよ。表の商店はだいたい千円から、三業は五千円くれたもんね。花街は一万円。今はなんで集まらないかという、世の中が変わっちゃって、旦那がいなくなっちゃった。社長さんばかりになって。旦那っていうのは金を自分で自由に使えるんだよ。社長は会社の人だから、会社のお金を個人で勝手に使えない。社長は交際費から出すので、領収書が必要。昔の旦那衆ってのはポンポンポンって自腹切れたわけだ。そういう旦那衆がいることで文化は育つんだけど

ね。今は会計士がちゃんと調べているから、勝手に金の出し入れができない。

お祭りなんかどんぶり勘定もいいところだった。ご祝儀持っていくときは酒を持っていく。酒瓶には店の名前書いてあるから宣伝になる。残った酒は酒屋持っていくって、引き取ってもらおう。そういうお金で子ども会なんかにも全部まかなっていたんだよ。そういうことがわかっていたから周りの人もみんな協力してくれていた。地域のなかで、お金がまわっていた。ついで買い物をして、終わったあとで清算していった。今はレジ打ちだからそれができないでしょう。昔はね互いの顔が見えて、信頼があった。地域文化っていうのができていたんだよね。

昔は、表通りで商売やっていたら、祝儀はずむのは当たり前のことだったからね、ご祝儀はずんで金を出さなきゃ商売できなかった。あそこはケチだっていうんでしまいいは、みんなが買い物に行かなくなっちゃう。逆に多少高くなったって、地元で買い物する意味があったけど、今はそんな縁も廃れちゃった：

俺の感覚では昭和35年くらいから、そういう関係が崩れてきてしまった。住人が入れ替わってきたからだね。その頃、周りに住

宅が増えてきた。地主が畑をやめて、アパートを作るようになってきた。昭和40年代くらいは大山街道の裏も変わってきた。住んでいる人が畑の臭いがくさいとか、肥だめに蓋をしるとか。農業もやりにくくなっちゃってね。土地を持っている人も、良い金が入ってくるから土地を手放しちゃったり。アパート経営なんかやって、日銭稼ぎに変わってきたから。汗水流すことはなくなったでしょ。田んぼの土が壁土にいいって、結構売れたんですよ。どんどん土を売っちゃったから。いちばん良い土を全部売っちゃって、そこを整地して家建ててる。

昭和40年代には鉄道が高架になり、畑なんか作れなくなっちゃうし。田んぼがアパートに変わって、アパートがまた変わって、今はマンションだ。町もすっかり変わっちゃったよね。

(平成25年11月29日)